「世界の続き」

沖縄県立首里高等学校三年　赤嶺　仁

沖縄戦。一九四五年にあった戦争で、わずか数ヶ月の間に二十万人以上もの犠牲者を出した残酷な出来事だ。私がおばあちゃんから聞いた話では、彼女のお母さん、つまり私のひいおばあちゃんにあたる人は戦争で地雷の破片が足に埋まり、そのまま一生を終えたと聞いた。小・中・高校では平和学習として実際に避難所として使われたガマや実際に戦争を経験した方を招いてお話を伺った。そうしていくことで、私たちは沖縄戦に関する多くの情報を学び、平和に対する考えを深めてきた。そして、今日の沖縄では多くの人に戦争の恐ろしさと平和の尊さが周知されている。

しかし、そこで止まってしまった。

二〇二一年の沖縄タイムス社とヤフーの共同アンケートによると、全国の回答者二千人のうち、七五・五％の人が慰霊の日を知らないと回答しており、県外の人々に慰霊の日が十分周知していないことが分かる。これは沖縄戦が風化していっている証拠なのだろうか。沖縄戦について語り継ぐという努力がまだ足りないということなのだろうか。

いや、そうではない。最も大切なことはそこではない。たしかに沖縄戦について知ることは平和を目指すきっかけとして大切なことであり、尊ぶべきことで、それが周知されていないということは悲しい事だ。しかし、最も大切なこととは意志をつなぐことだ。いつか実際に戦争を体験した方々が全員いなくなって、生きた苦しみや生きた経験や生きた記憶がなくなってしまうかもしれない。今でさえ、沖縄戦に関するすべてのことが分かっているわけではない。死んでしまった記憶が、死んでしまった人生が確かにこの沖縄の地に埋まっているのだ。記憶というものは語り継ぐことで伝えることはできるが、実際の体験者から出る生の言葉は体験者の死とともに質感が薄れていってしまう。それはどうしても抗うことのできない時間の残酷さである。しかし、意志は違う。本物の記憶は実際の体験者にしか根づかない物なのに対して意志というのは誰の心にも生まれ、息づいていくものなのだ。実際に戦争に参加した記憶がなくとも、絶対に再び戦争を起こしてはいけないという意志を持つことは実体験者であってもそうでなくてもできることなのだ。肉体が死に、記憶が死んでもその先にある意志さえ死ななければ沖縄戦は風化しない。ただ、そこで止まっていてはいけない。さらに重要なのは沖縄戦の記憶を、想いを、意志を自分の中で持ち続けるだけでなく、今の世界に生かすことだ。

そう、ウクライナ侵攻である。このウクライナ侵攻では、軍人だけではなく民間人も負傷者一万三千人、死者八千人という大きな被害を受けた。民間人にも被害が及ぶという点で、沖縄戦と重なるところがある。他国の出来事だから自分には関係ないなんて切り捨ててはいけない。ないがしろにしてはいけないのだ。たとえ一国対一国の戦争でも世界を揺るがす大事に至る。実際にウクライナを侵攻したロシアには世界中から経済制裁が加えられ、ロシアの民も苦しんでしまう事態となっている。さらにこの余波は日本にも押し寄せてきている。それは防衛費の増額だ。アメリカと諸先進国との同盟共闘の条件として、自力での防衛努力の姿勢を見せることがあり、そのため日本でも防衛費が増額したというわけだ。たった二国間の争いが波紋となって世界に緊張を走らせる事となってしまったのだ。今回の件は、単に先進国であるロシアが大きな戦事行為を起こしたからここまでの問題となってしまったなどと侮ってはいけない。世界には争いの芽がごまんとある。宗教的、民族的な対立による紛争や差別だ。芽は血の雨を浴びて深く根を張り、苦しみや憎しみを蔓延させる。小さな紛争も巡り繰り返される中で世界中を巻き込んだ大事案へと至る。そんな混沌とした世の中だからこそ意志の力が生きてくる。私たちを生かす希望となる。ウクライナ侵攻も、先進諸国の団結がなければさらに酷いことになっていただろう。おそらくこの団結は政治的な意図もあったと思う。しかし、その根底には強い反戦の意思があったはずだ。あったと信じたい。日本だけではなく、いろんな国が長い歴史の中で培ってきた反戦の意志のバックグラウンドには戦争の苦しさ、辛い記憶があるだろう。私たちにとってはそれが沖縄戦だった。ルーツが違う、言語も違う、人種も違う。だとしても世界の人々と私たちの心には反戦の意志が宿っていて、きっと心を通わせ団結できるはずだ。

世界は続いていく。時という波の中で記憶は侵食し、薄れていく。しかし、意志は死なない。暗い戦争の記憶から学び得た反戦の意志を持って私は生きる。私たちは生きていく。絶望の雨をもう決して降らさない為に。世界の続きを明るく照らすために。